

文斗委ティーチ・イン

成功も中からなり ティーチ・イン・セミナーでした。

大学斗争=全共斗運動を問う その1

第1章 まえがき

文斗委ティーチ・インは11月1日(土)、1時30分より6時まで4時間30分にわたって行われた。ティーチ・インのねらいは、「我々のあり方は現代の高度資本主義社会から規定されているのだが、その規定された我々から逆に高度資本主義社会の改革の道と、『人間』を探る』(文斗委パンフ)ことである。会場の410教室には延べ300名の学生、院生、教員が参加した。彼らは何を論じ、新たな戦いの場をどこに設定するのであるか。以下は文斗委の1メンバーによる、当日の断片的な再現である。(ただし、多数の発言者の内容をひとつにまとめたり、筆者の多少の主観による色づけしたものであることを、あらかじめお断りしておく)

第2章 大学討論 — 断片的再現

— 現代の科学技術が、全体として資本主義を維持するものであるのだから、大学で研究することは、自らが体制をねむるところしてしまうのではないか。私はそのことで「1年ほど自分の研究(工学部)をやつてしまいながら、研究しない研究者としての私は、果して大学にいる必要があるのではなか?

— 研究をやつていなくとも、大学には意味はある。私は田舎の学生で、親鸞の研究をやっていたのだが、現在の情況一純然陀入、自己批判教育の授業再開強行のもとで、私は自らの研究をすべきないと考え、そのことを実行している。現在のような情況のもとで研究をやらないことも「研究」になるのではないか。

— それは観念上の操作だけであって、問題はそんなことでは解決しない。いくら「革命的」な親鸞研究であるとも、現体制のもとでは、その成果は体制に吸い上げられることは避けられない。このことは文科系でも変わらないと思う。研究は、世界一内一研究で最も限り、体制による規定性は「革命的」を指向しており、てしまうのだ。

— どうだよ。オレたちにはまさに、学問とは何物でもない、という地獄から出発せぬアカンのや。学問に意義なんかあるもんか!

— 我々は研究を放棄する必要はない。我々の研究が、体制一内一研究として、体制に常にかすみとられたり子といふ自覚、研究の社会的役割の自覚こそが、研究が体制一内一研究としてありつゝも、それが体制を突破しうるバネとなるのだと考へてはいたが…

— 私はすでに、自分の研究が現体制に奉仕するものとしてしか存在しないことを自覚した。だが、どこに、それからの突破口があるのか。

— 研究テーマに公害問題を選ぶとか、研究テーマを同士的に選ぶとかして、研究を反体制側に有利に展開しようと思うが…

— いや、私の言っているのは、研究テーマその選択の問題ではないのだ。どんなく進歩的な研究でも、現体制の中では体制補完の意味しか持ちえないことに対して、研究者としての私が何ができるのか、ということなのだ。

— 科学も体制一内一科学である限り、体制に奉仕するには当然だ。だから我々としては、学問の変革というよりも、まず体制の変革=自衛打倒=具体的には佐藤詩郎阻止から70年安保争議をいかに担うかという課題一をめざすことが必要なのだ。(右二に下がく)

— それでは政治を外と同じ論理ではないか。 11月4日。文斗委
問題をどのように設定してしまえば、我々が研究者である必要は全くないのではないか。研究室以外で体制打倒を呼び、研究室で体制維持の研究をするなんて耐えられないことだ。研究者の存在被拘束性と、それから生ずる研究の階級性こそが、大学斗争は告発してきたのだ。

— 学問の変革といつても、学問の中に斗争などあるいはない。社会主義社会になれば、学問は社会主義に奉仕するものなのだ。科学は生産を組織する階級によって生がれる。

— そうではない。學問が体制一内一學問であると云うのは、どんな研究でもその社会的規定性を免れ得るものではないし、自然科學においても、特定の社会実体の中ににおける人間が与えた限りの自然の体系であるのだから、超階級的なものはない、ということだ。自然科學は資本主義にも社会主義にも奉仕するといふのはマヤカシであり、月口ケットにしても、それが人間の解放などうながすのがという向いを抜きにして、科学の成果だ、などと賞賛できない。現代の科学技術はアメリカとソ連の軍事競争によって動かされている。

— 問題はどうぞはない。現代日本においては、だれもが矛頭を引きさかれてはいる。原爆製造人が原爆反対斗争に立ち立つのが、まさに現代なのだ。だから我々として、まず最初にせねばならぬのは、現代の学問研究が全体として体制維持の役割を担うことと銳く自覚することなのだ。だから、民青諸君のように超階級的な科学の二面性論(支配者のための研究と、人民のための研究が現体制内と並存する、あるいは、しるといふ主張)によって、自らの研究を正当化するとはギマンであり、資本主義社会における研究者(頭脳労働者)の特権をねむるのは犯罪的なことなのだ。私が研究者として存在している理由は、体制一内一研究の犯罪性をバクロすること—それは私の研究の成果としてバクロすること(例えば公害の研究)ではない。公害の研究そもそも資本の論理で動いていたのだ。私が自らの研究をストップさせること、あるいは私がある特定の研究分野を専門化し、ストップさせることによって、バクロすることなのだ。資本主義社会における知識人の存在意義は、まさにそのような消極性(否定性)においてあるのであり、学問研究とはなんにチャホヤズベキものではないのだ、ということを示すのが知識人であるのだ。大学争議における自己否定の問題は、決して個人の倫理性にマイナスされべきではなく、まさに現実における、文化と政治の両面における革命の論理、人間解放の論理としての意味をもつのだ。

第3章 コミューン戦士の決意 (アヒト)

オレたちの弱さを苏えに入れて、おまえたちは

オレたちをドレイにすま法律を作った。

オレたちはもはやドレイでいることと望まないことを苏えに入れてこの法律は今後ももらないことにしよう。

おまえたちはどうかは銃と大砲で

オレたちをおどしに来ることを苏えに入れたうえで

オレたちは決意した、これからは死を怖れるよりは
むじろみじめに生きることを恐れよう。

文斗委

参考資料

「MARUHI 内部資料・その1」
「LGBTQ+項目要求の背景とその具体化」
「10/30付 幸福の祭典」
「理院協議会に向けた」

② 全共斗運動の
更なる深化を!